

せんぐう館 平成 26 年度企画展示

式年遷宮はつづく—萱山の営み— 図 録

期間 平成 26 年
9/25 [木] ~ 12/23 [火]



開館時間 9 時～16 時半

休館日 10 月 28 日 (火)・11 月 25 日 (火)

お問合せ 式年遷宮記念せんぐう館

〒516—0042

三重県伊勢市豊川町前野 126-1

☎0596-22-6263

<http://www.sengukan.jp/>

企画展示によせて

伊勢の神宮は昨年 10 月に遷御が滞りなく行われましたので「式年遷宮は終わった」と思われるかも知れません。しかしまだ十二ある別宮の遷宮が継続中です。今回の式年遷宮は来年春に区切りとなりますが、次回の式年遷宮に向けた日々の営みは今も着実に続けられています。

本企画では式年遷宮の「技」をテーマとして、わが国独特の神社建築である「神明造(しんめいづくり)」の屋根材である萱に焦点を合わせ、神宮の萱山の営みと歴史、萱工の仕事について特集します。萱葺の解説、神宮の式年遷宮用地である川口萱地成立の歴史を伝えるパネル展示や萱工が造営作業など長年使用してきた道具類をご覧ください。

社殿造営に携わる小工の技や心構えを通して、何のために準備は続けられ、そして式年遷宮が 1,300 年間伝えられているのかにぜひ注目してください。

平成 26 年 9 月 25 日

式年遷宮記念せんぐう館

目次

企画展示によせて

目次

一、神宮と萱葺屋根

二、神宮の御萱

三、川口萱地の歴史

四、川口萱地の今、そしてこれから

五、おわりに――式年遷宮はつづく

よくあるご質問

凡例

・この図録は平成二十六年九月二十五日から十二月二十三日にかけて式年遷宮記念せんぐう館において開催する企画展示「式年遷宮はつづく――萱山の営み――」に際して作成したものである。

・図録の資料図版の順は、展示順序を示すものではない。

・展示資料の写真は神宮司庁広報室と宮林部で撮影した。

・本書の編集・執筆は深田一郎があたった。

神宮と萱葺屋根

○神宮の社殿は「萱葺（かやぶき）屋根」です

わが国の伝統的な木造建築の屋根には、《瓦葺》や《銅板葺》、ヒノキ・サワラ・スギなど木材を素材とする《板葺（こけらぶき、柿葺）》、ヒノキの樹皮^{じゅひ}を素材とする《檜皮葺（ひわだぶき）》などがあります。そして神宮では、ススキなどイネ科の植物を素材とする《萱葺（かやぶき、茅葺）》が取り入れられており、このことは両正宮と別宮の社殿に見られる建築の特徴です。

○「茅」とは何？

茅（かや）とは屋根を葺くために用いる草の総称です。その素材は主にススキ（薄・尾花）であり、この他にヨシ（葦）、カリヤス（荻安）、チガヤ（茅）などのイネ科^{たねんそう}の多年草が使われます。

神宮ではススキのみを使って葺き上げられますので「萱葺」として区別しています。



○萱葺屋根は有効機能がいっぱい！

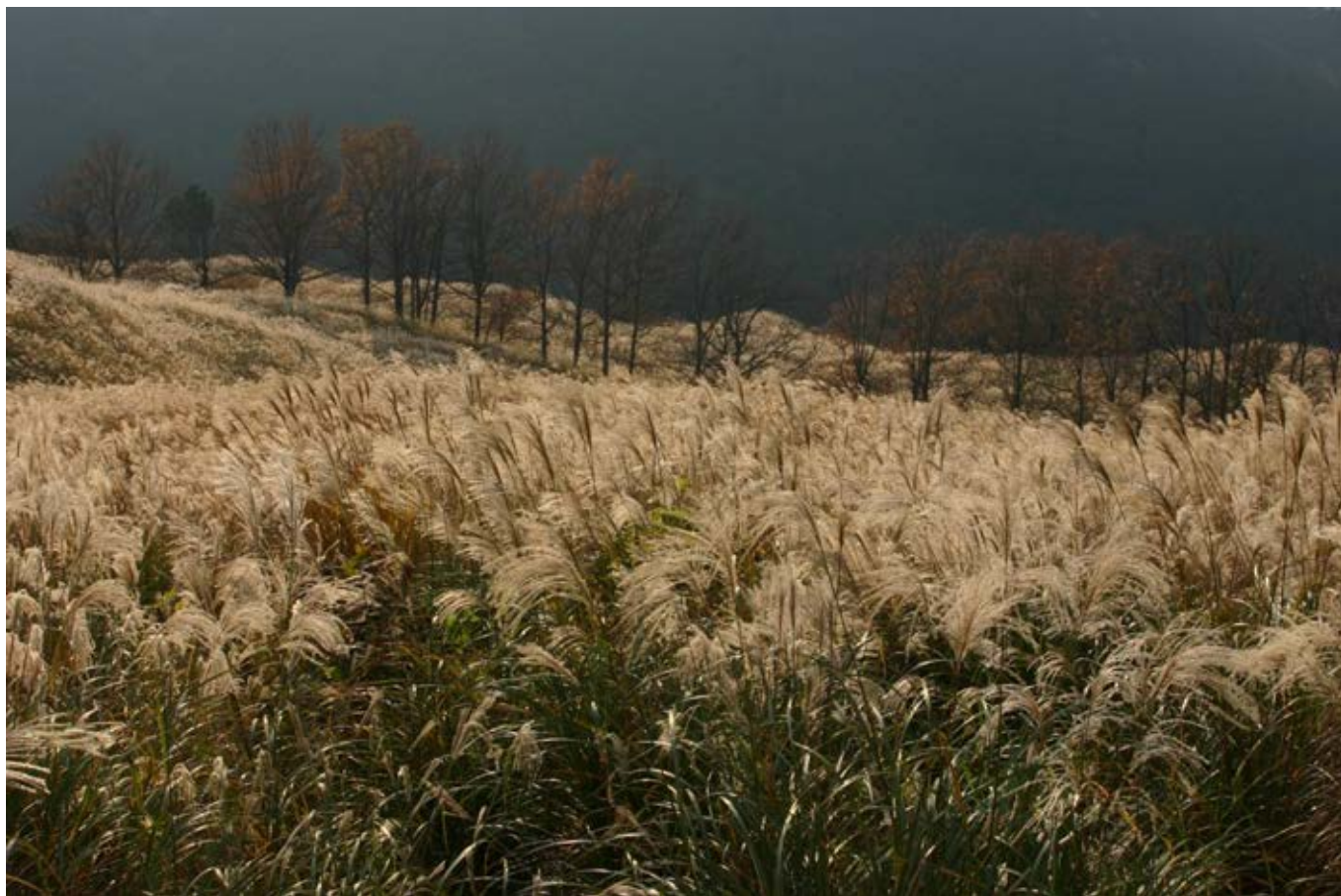
萱葺のもっとも優れた性質は、太陽の^{ふくしゃねつ}輻射熱を防ぎ、室内の熱を外に放出しない「^{だんねつせい}断熱性」です。それは自然素材を厚く丁寧に重ねることで「空気層」が形成されていることに由来します。この空気層には適度な空調ができる「^{つうきせい}通気性」や「^{きゅうおんせい}吸音性」の効果も兼ね備えています。またススキなどの素材には油分を含んでいるので、屋根の^{こうばい}勾配をきつくして水はけを良くすることから^{はっすい}撥水効果による「^{ぼうすいせい}防水性」にも優れています。



○萱材の利点はこんなところにも！

ススキは身のまわりでごく普通に見られる植物です。^{ぐんせいち}群生地を確保すれば「安定的な供給」が見込めることも大きな利点です。それには毎年の草刈り、火入れなどが必要ですが、繰り返し続けられれば再生産することが可能となります。

このように採集するため管理された土地を「萱場」^{かやば}といいます。明治以降、ススキの群生地は減っていますが、現在も「茅場」^{かやば}や「萱町」^{かやまち}という地名が見られます。そこはかつて萱の生産が行われていた場所の^{なごり}名残です。



○神宮の萱はどこから？

ススキなどイネ科の植物は全国のいたるところで群生していましたが、現存する萱場は全国に数えるほどしかありません。神宮では昭和 18 年（1943）から三重県^{わたらいちょう}度会町^{かわぐちかやち}に「川口萱地」（100ha）と呼ばれる専用の萱場を設けてススキを生産しています。



川口萱地



川口萱地での火入れ（平成 15 年）

神宮の御萱

○萱場成立前史

萱は^{でんしゃ}殿舎の^{ぞうえい}造営に使われています。明治以前には一定の萱場というものは存在せず、どの地域から供給されたものかを明らかにする^{ぶんけん}文献や資料はありません。
神^{しんりょう}領とされてきた^{わたらいぐん}度会郡や^{たきぐん}多気郡の^{やまあい}山間から採取したものとされています。これはどこでも普通に生産できる素材であることを示しています。ただ、15世紀初頭の南北朝時代の^{せんぐきろく}遷宮記録には「山口祭以後、^{さんかねん}三箇年生ゆる所の御萱を以て、之を^{せんぎ}葺き奉るの条、^{おうえいしちねんかりどのせんぐうき}先規と為す」（『應永七年假殿遷宮記』）とあり、良質な萱を集めることに努めていたことがわかります。

○^{ごりょうかやち}御料萱地の成立

明治以後は、かつて萱地であった場所の再開発が進められて全国的に耕地面積が減ったため、生産量も減少傾向にありました。神宮では萱の安定的な調達に万全を期すため、大正元年（1912）より以下の場所にて萱場の整備が進められました。

○^{わたらい}度会郡^{ぬまき}沼木村大字上野（現在の伊勢市上野町）に2ヶ所

○度会郡中川村大字^{しめさす}注連指（現在の度会町注連指）に2ヶ所

○度会郡^{おがわごう}小川郷村大字小川（現在の度会町小川）に1ヶ所

○度会郡^{ななほ}七保村大字^{えいかい}永会（現在の^{たいき}大紀町永会）に1ヶ所

○多気郡^{みせだに}三瀬谷村大字^{やきい}弥起井（現在の^{たいだい}大台町弥起井）に1ヶ所

合計 140 町 4 反 26 歩（およそ 139.2 ヘクタール）

しかし昭和4年（1929）の第58回神宮式年遷宮では不足が生じたため、次回の遷宮に向けた萱場の拡張が急務とされました。その際に新設されたのが現在の式年遷宮用地である^{かわぐちかやち}「川口萱地」です。

川口萱地の歴史

○新たに設けられた川口萱地^{かわぐちかや ち}

^{ないむしょう}内務省・^{ぞうじんぐうしちよう}造神宮使庁は御料萱地の拡張計画により調査を始めました。その結果、これまでの造営に際して御萱御奉納の実績があった^{わたらいぐんおがわごうむら}度会郡小川郷村大字^{かわぐち}川口の^{けいしゃち}緩傾斜地100町（およそ99ヘクタール）を適地とし整備にあたりました。この作業を行ったのは^{だいにっぽんせいしょうねんだん}大日本青少年団の団員達です。川口萱地の御萱は昭和28年(1953)第59回神宮式年遷宮で初めて用いられ、現在も萱葺屋根造営の^{ごりよう}御料として使用されています。



造成前の川口



完成直後の川口萱地



現在の川口萱地

○萱地の整備事業

大日本青少年団は、昭和 16 年（1941）全国の青少年団を統合して結成されました。同本部は全国から特に優秀な男女を選抜して「大日本青少年団^{じんぐうおんかやち}神宮御萱地^{きんろうほうしたい}勤労奉仕隊」を編成。昭和 17 年 4 月より森林の開墾・道路の開通・萱の植栽、また奉仕者の炊事・洗濯などにあたりました。戦時下の厳しい状況の中、作業道具や食料品の調達も困難を極めましたが、隊員は「萱場精神^{かやばせいしん}」を合言葉に^{まごころ}真心を込めて作業奉仕されました。



作業風景（抜根）



作業風景（炊事）

昭和 18 年 6 月に全ての事業を終えて解散。期間中は男子 3,646 名・女子 332 名、延べ 51,433 名が従事されました。戦後、奉仕隊の有志が「日本青伸会^{にほんせいしんかい}」を設立し、現在は公益社団法人として神宮への奉仕活動^{ほうしかつどう}を続けています。川口萱地には奉仕隊の業績を後世に伝える石碑が建てられています。



川口萱地の今、そしてこれから

○第 62 回神宮式年遷宮の成果

現在、川口萱地は神宮司庁営林部が管理しています。毎日の点検作業を行い、そして1年を通じて余分な草や木を刈り取り森林にならないよう維持施業が続けられています。今回の第 62 回神宮式年遷宮では、平成 17 年から 24 年の 7 年間にわたり 7 尺（およそ 2.1m）ほどに伸びたススキを採取し、社殿造営に必要な数の目安である 23,000 束を確保することができました。採取期間は 1 月から 3 月まで、1 日 100 名ほどが従事して年間 3～4,000 束を採取しました。1 束は直径約 40cm 重さは約 30kg になります。



○萱地の維持と問題

川口萱地にある「八反平」^{はったんだいら}は、良質なススキを得ることができた場所でしたが、ここ数年は生えてくるススキに元気がないそうです。その原因のひとつは植生^{しょくせい}に変化が生じていることです。イタドリやワラビなどの山菜は昔からよく生えるそうですが、これまであまり見ることがなかった笹^{ささ}や外来種であるセイタカアワダチソウ、また今まで見られなかった植物も生えてきているようです。八反平の植生を取り戻すために、これまでに植えたススキを全て刈り、整地をして優良なススキを植えています。



整地が進められている八反平



赤丸部分は笹が群生している

またススキを採取する冬の季節にも変化が起こっています。採取の時期が1月から3月に限られている理由は、すっかり枯らす必要があるからです。しかし伊勢でもこれまでにない様な大雪が降ることがあり、採取前のススキに被害が出ることもありました。あるいは気温が高く、年によっては根元まで十分に枯れないまま新芽が出てくることもあったそうです。この20年には気候の変動や環境の変化など、様々な困難があったのです。



○おわりに―式年遷宮はつづく

これからの式年遷宮の社殿造営にも川口萱地のススキは必要不可欠です。今回は出来たからといって次回も単に同じことを繰り返すだけでは、先のような困難を乗り越えることは出来ません。それを克服するためにはこれまで得た経験に「新しい叡智」を加える必要があります。こうして引き継がれる営みが「伝統」といえるのではないのでしょうか。

先人の業績を尊び、経験を得て学び、工夫を加えて将来に繋げる。わが国が式年遷宮によって伊勢の神宮を維持してきたことの意義を、これからも続けられる萱山の営みから学んでいただければ幸いです。



よくある質問

<質問>

川口萱地にはどのような人たちが従事していますか

<回答>

山を守っているのは神宮より^{せいたく}請託されている度会町在住の方々です。山に異常がないか、ほぼ毎日のように点検をしています。ススキの刈り取りは主に志摩地域の水産業に関わる人たちが携わっています。従事者のおよそ8割が女性です。



<質問>

たくさんのススキをどのような方法で刈り取るのですか？

<回答>

今回の御料萱は全て一人一人が鎌を用いて手作業で刈りました。従事していた者は萱を穢すことのないよう安全作業に心掛け優良な萱を選別しました。この萱で神宮の社殿が葺き上げられる喜び、何事にも替えがたい誇りを感じます。



<質問>

ススキはどのように育てるのですか

<回答>

ススキはいわば「雑草」の類です。天然更新と呼ばれる自然な育成でも十分に生えますが、刈り取りの時に多種が混在していて手間が掛かります。そのため「株分け」を行っています。生育の良いススキの株を取り分け、間隔を広くとって植えることで、より良い育成と刈り取りの効率化を図ることができます。



株分け



整然と並ぶススキ

<質問>

ススキを長期間蓄えるとダメになりませんか

<回答>

十分に乾燥した状態で刈れば、大きく変質することはありません。川口萱地にはススキを蓄える乾燥小屋がありますが、特別な空調機器はなく天然乾燥です。



乾燥小屋

<質問>

川口萱地の見学は出来ますか。

<回答>

萱地の環境保全のためご遠慮いただいています。